

たまねぎのべと病に引き続き注意！

1 発生状況

- (1) 4月下旬の巡回調査においてはべと病の発生は平年並であったが、一部地域で多発しているという情報提供があった。また、向こう1ヶ月の降水量は平年並～多いと予想されている。
- (2) 本病は、降雨後の多湿時に発生が急激に広がりやすい。毎年発生が見られるほ場では、よく見回り、早期発見・早期防除を実施する。

2 生態と発生条件

- (1) 11～12月に、苗床や定植後のほ場で作物残さなどから感染する。病原菌は感染した株内で越冬する。
- (2) 2～3月に見られる越冬罹病株では、葉が萎縮黄化し、つやがなくなってねじ曲がり、硬くなる(図1)。降雨後の高温・多湿時には、葉全体にかびが見られることがある。
- (3) 3～5月に、気温が15℃前後で、降水量が多くなると越冬罹病株からの2次感染株が増え、急速にまん延する。2次感染株は、葉に淡黄緑色で楕円形の病斑が現れ(図2)、多湿時には霜状のかび(図3)が生じることがある。
- (4) 気温6～19℃で胞子を形成し、最適気温は13～15℃である。また、気温15℃前後、湿度90%以上で胞子が発芽する。
- (5) 胞子は発病株から周辺100m程度に飛散し、強風時はさらに広範囲に及ぶ場合がある。



図1 越冬罹病株

図2 2次感染株
(淡黄緑色で楕円形の病斑)図3 2次感染株
(霜状のかび)

3 防除

- (1) 発病株は健全株への感染源となるため、速やかに抜き取り、集めてほ場外に持ち出し処分する。
- (2) 予防効果のある薬剤は、発病前に散布することが重要である。表1を参考に薬剤散布を行う。
- (3) 発病株を見つけたら(1)を行うとともに、できるだけ早期に治療効果のある薬剤(表1)を散布する。なお治療効果のある薬剤でも、発病が広がってからでは十分な効果が発揮されないので注意する。

4 その他

降雨が続くと、灰色腐敗病や軟腐病も発生し、貯蔵中にも感染が広がる。中生、晩生品種は、晴天続きの日を狙って、しっかりと茎葉が倒れてから収穫する。

表1 たまねぎ べと病の防除薬剤例

薬剤名	系統(FRAC)	効果	希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数
ジマンダイセン水和剤・ ペンコゼブ水和剤 ※1	ジチオカーバメート(M3)	予防	400~600倍	収穫3日前まで	5回以内
ランマンフロアブル	QII(21)		2,000倍	収穫7日前まで	4回以内
ホライズンドライフロア ブル ※2	シアネトアミド=オキシム(27)、 QoI(11)	予防・治療	2,500倍	収穫3日前まで	3回以内
プロポーズ顆粒水和剤 ※3	クロロニトリル(M5)、 CAA(40)		1,000倍	収穫7日前まで	3回以内
ザンプロ DM フロアブ ル	CAA(40)、QoSI(45)		1,500~ 2,000倍	収穫7日前まで	3回以内
ベトファイター顆粒水和 剤 ※2 ※3	シアネトアミド=オキシム(27)、 CAA(40)		2,000倍	収穫7日前まで	3回以内
リドミルゴールド MZ ※1	ジチオカーバメート (M3)、 フェニルアミド(4)		500~ 1,000倍	収穫7日前まで	3回以内

<各薬剤に含まれる成分の使用回数の制限に注意しましょう>

※1 ジマンダイセン水和剤及びペンコゼブ水和剤、リドミルゴールド MZ に含まれる成分マンゼブの総使用回数は、5回以内。

※2 ホライズンドライフロアブル及びベトファイター顆粒水和剤に含まれる成分シモキサニルの総使用回数は、3回以内。

※3 プロポーズ顆粒水和剤及びベトファイター顆粒水和剤に含まれる成分ベンチアバリカルブイソプロピルの総使用回数は、3回以内。